

論文



湯島聖堂の賢儒図像扁額の研究

—筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》を通しての考察—

中 根 恭 子

はじめに

一、筑波大学附属図書館所蔵《賢儒図像扁額模本》について

(一)《賢儒図像扁額模本》の概要

(二) 本学附属図書館所蔵に至る経緯

二、東京国立博物館所蔵《賢哲図像》と『七十二賢像賛』

(一) 各図の概要

(二) 図様の比較

おわりに

はじめに

湯島聖堂の歴史を綴る『昌平志』によると、全二一幅から成る狩野山雪筆《歴聖大儒像》のうち程伯子、張子、朱子、周子、程叔子、邵子の六幅は、湯島聖堂において、釈奠という孔子を祭る儀式を行う際に孔子像を中心に従

祀して掛けられていたとされる(1)。東京高等師範学校の有志の教師たちにより明治時代に入り廃れてしまった釈奠を復活させるために持ち出されたとみられ、そのまま筑波大学に所蔵されるに至っている。

『昌平志』にはさらに、湯島聖堂内には先賢先儒八九人を描いた一六枚の扁額が掛けられていたと記されている。元禄元年(一六八八)狩野益信が「賢儒図像」を一六枚制作したものの、元禄一六年(一七〇三)罹災焼失し、宝永元年(一七〇四)狩野常信により、再び制作されている(2)。聖堂は、その後安永元年(一七七二)、天明六年(一七八六)の二度に渡り、類焼するが、その際、「賢儒図像」が災を免れたか否かは不明とされている(3)。筑波大学附属図書館所蔵《賢儒図像扁額模本》は「東京高等師範学校図書館印」と共に「松谷天来之粉本」印が捺されており、前述のいずれかの図か、あるいはその流れを汲んだものを、松谷天来なる人物に模写されたものとみられている。しかし、『歴聖大儒像』に比べ、大学内においてさえもその存在を知る者は少なかったとみられる。文献上歴史的な価値を持つ賢儒図像扁額であるが、『賢儒図像扁額模本』は、すでに二枚失われている上、賢儒図像扁額及び

《賢儒図像扁額模本》に関する資料も限られ、両者を結びつけるものも薄く、松谷天来を始め、今なお不明な点が多いのが現状である。

報告書においては、こうした点を踏まえ、筑波大学附属図書館所蔵《賢儒図像扁額模本》の図像内容を整理した。さらに聖堂内における配祀の仕方について、『昌平志』の元禄四年に改作されたとされる《昌平廟学図（正位暨配享従祀諸賢儒方位次序図）》（4）における詳細な記述から、この記述及び図に示される配祀順は、筑波大学附属図書館所蔵《賢儒図像扁額模本》の人物の配置順及び、画面端に記された「左ノ一」「右ノ一」の順とも一致していることが明らかとなった。従って、文献上から見ても、作品の特徴からみても、筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》は『昌平志』に記される、先賢先儒八九人を描いた一六枚の扁額の下絵「賢儒図像」を指すものと推定し、結論づけた。

しかし、図像内容の一致と、配祀順の一致だけで、筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》が、湯島聖堂内に掲げられていた、一六枚の扁額の下絵であると、結論づけるには論拠が薄いと言わざるをえない。

冒頭にも触れた通り、『昌平志』には、最後に一六枚の扁額が制作されたのは、狩野常信によるものとされているが、東京国立博物館には狩野常信筆《賢哲図像》が所蔵されていることがわかった。またすでに歴聖大儒像と中国の粉本との関連性が指摘されているのと同様に（5）、この《賢儒図像扁額模本》においても、中国の粉本の存在が指摘されているが、具体的に『七十二賢像贊』『聖廟祝典図考』がその中国の粉本ではないかと、考えられる。

そこで、本稿においては、この《賢儒図像扁額模本》に関する資料を整理し、東京国立博物館所蔵狩野常信筆《賢哲図像》と、『七十二賢像贊』（国立国会図書館所蔵）、『聖廟祝典図考』との比較を通して、失われた二枚を復元

すると共に、湯島聖堂における《賢儒図像扁額模本》の意義を考察することとする。

一、筑波大学附属図書館所蔵《賢儒図像扁額模本》について

（一）《賢儒図像扁額模本》の概要

《賢儒図像扁額模本》は、元は一六枚あったとみられるが、一四枚から成り、一枚に五―八人ずつ、計八九人の賢儒像を描いている。薄紙を何枚も繋いでいる上、各図には必ず枠が描かれる。その各図の枠上の右上隅には「六尺五寸八分」といった額の大きさを示す紙が添付される。また、「左」図は図の右上隅に、「右」図は図の左上隅にそれぞれ「左ノ一」「右ノ一」といった図の配置順を指示する紙が添付され、各賢儒像の上にもやはり同じように、「左」図は人物の右上に、「右」図は左上にそれぞれ「左一 澹臺滅明」「右一 宓不齐」といった各賢儒像の尊名を示す紙が添付されている。さらに各賢儒像の着衣部分には、読みとれるかそれないかほどのかすかな字体にて色を指示するとみられる文字が書かれている。こうした点からみて、この一四枚の図は、《賢儒図像扁額》を描くための模本であったとみられる。落款等はいずれも、模写した人物を知る手がかりは、唯一、各図裏に捺された朱文方印「松谷天来粉本之印」と朱文方印「東京高等師範学校図書館印」である。後にも触れるが、この松谷天来なる人物についてはまだ明らかでない。

『昌平志』には「賢儒図像共八扁或五六位或七八位共為一扁掲於兩廡次序起北転至於南」と記され、併せて《昌平廟学図（正位暨配享従祀諸賢儒方位次序図）》を掲載している（6）。こうした記述と《賢儒図像扁額模本》が一致していることは報告書においてすでに触れている。

名称については、文献上において本図を指すとみられる語が度々登場している。「賢儒像」「賢儒像扁」「賢儒圖(図)像」(いずれも『昌平志』(7)あるいは「七十二賢及び先儒の畫(画)像扁額」「先賢先儒の畫(画)像」(いずれも『聖堂略志』(8)などと、同じ文献上においても定まっていない。一方、筑波大学附属図書館においても、『東京高等師範学校図書館和漢書名目録』(9)及び『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』(10)まで遡らねばならず、「賢聖障子図」と記されている。

「賢聖障子」とは、『古事類苑』に「画皇居南庇東西障子、作歷代鴻儒像、所謂紫宸殿賢聖像是也」(『本朝画史二 上古画録』)とあるように(11)、元来、平安京内裏紫宸殿に所在し、漢唐代の賢人、聖人、功臣三二人を東西各四間に一間に四人ずつ描いた障子絵を指している(12)。その三二人の内訳も、筑波大学所蔵の本図と一致する人物は、董仲舒ぐらいである。しかし、平安時代初期に賢聖障子図が作成された背景には、朝廷が釈奠を執り行うなど、儒教的統治方針を布いていた点を指摘されており(13)、《歴聖大儒像》や筑波大学所蔵の本図が作成された背景と、類似している。本図が、東京高等師範学校に受け入れられるにあたり「賢聖障子図」と題されたのは、このような点に加え、内裏造営の際、代々の狩野派が紫宸殿における賢聖障子図の制作に携わったことも考慮に入れ、他に替わる名称もなかったために付けられたと考えられる。本図に関してはこれまでに充分な論考がなされてなかったこともあり、賢聖障子図とは明らかに内容の異なる図を指すため、本稿においては「賢聖障子図」という名称を改め、『賢儒図像扁額模本』という名称を使用することとした。

(二) 本学図書館所蔵に至る経緯

《賢儒図像扁額模本》は、現在のところ、紙背の図書館印等以外に筑波大学附属図書館所蔵に至る経緯を示す資料は、残されていない。従って、『歴聖大儒像』等関連する資料を辿り、推定するより他ない。

《歴聖大儒像》は、記録及び印により、ある程度は、筑波大学附属図書館に所蔵される経緯を辿ることができる(14)。略述すると、明治四年(一八七二)の昌平坂学問所閉鎖に伴い、明治七年(一八七四)には湯島聖堂より蔵書と共に「浅草文庫」と称する旧米倉に移される(15)。浅草文庫とは、明治七年(一八七四)から明治十四年(一八八二)にかけて、明治五年(一八七二)の書籍館建設に際した分類で「書庫ノ部ニ入ルヘシ」と組み込まれた書画を含め、前身の書籍館から引き継いだ旧昌平坂学問所の蔵書を所蔵していた公共図書館である(16)。短い期間であるにもかかわらず、その全蔵書に「浅草文庫」という朱文方印を捺されたとされている(17)。そのため、本稿においては、所蔵の経緯を知る一つの手懸かりとして、「浅草文庫」印の有無を重要視した。その浅草文庫の「借覧人心得規則」によると、「博物館本館設立迄古書画ノ類モ当分此文庫ニ於テ借覧ヲ許ス」とあるように、明治十四年(一八八二)には上野の博物館新設により、再び移される(18)。さらにその後当時湯島聖堂構内にあった教育博物館(現在の国立科学博物館)に戻される。そして、明治四〇年(一九〇七)聖堂の祭祀が廃れてしまったことを遺憾とした東京高等師範学校(筑波大学の前身)の教官達を中心とする同志によって孔子祭典会が創設され、祭祀を執り行ったと記されている(19)。その「孔子祭典会々報」においては、明治四〇年(一九〇七)四月の第一回から大正二年(一九一三)第七回に至るまでは毎号、祭典会の開催に際し、東京帝室(帝国)博物館に「礼器祭器」の、東京高等師範学校、東京女

子高等師範学校に「器具の使用の便を与えられ」しことに感謝の弁を附記している。一方収納されている木箱蓋に貼られた、孔子祭典会委員中村久四郎氏に解説文には、大正三年（一九一四）一〇月の日付で「二十一幅皆伝わりて、現今周張以下宗儒の六幅は高等師範学校にあり。其他の十五幅は東京帝室博物館にあり。」と記されている。尚、この中村氏の解説文は大正三年（一九一四）十一月八日に執り行われた第八回孔子祭典会の際、記念品として會員諸氏に配られた「狩野山楽^{さんらく}画朝鮮来聘副使金世謙賛宋の六子の写真」に録されたものとみられる（20）。軸裏には「浅草文庫」印及び筑波移管の際捺された「東京教育大学附属図書館」印のみ認められる点から、六幅は、少なくとも明治四〇年（一九〇七）から大正三年（一九一四）には東京高等師範学校に、孔子祭を執り行うための聖像として「保管」されていたものと推定される。

それに対し、『賢儒図像扁額模本』は、紙背の「東京高等師範学校図書館印」及び、東京文理科大学の管理時に貼られたとみられる図書館内分類番号印より、当初から書籍として収蔵されていたとみられる。大正元年（一九一二）末までの所蔵の和漢書を記す『東京高等師範学校図書館和漢書名目録』には、「賢聖障子図 一六枚」となっていたのに対し、昭和八年（一九三三）までの所蔵の和漢書を記す『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』になると、「賢聖障子図（二枚欠） 一四枚」となっている。こうした点は、現在残されている一四枚の図の一部に、泥の付着や、水しみ、すすけている部分が見られる点と合わせ、大正一二年（一九二三）の関東大震災の際に、二枚を紛失したとされているのを裏付ける（21）。

また、筑波大学所蔵『賢儒図像扁額模本』には筑波大学所蔵『歴聖大儒像』に認められた「浅草文庫」印は捺されておらず、これは、少なくとも明治七

年（一八七四）以降『歴聖大儒像』とは異なる状況であったことを示している。混乱の中何らかの理由で別の場所に保管されていたとも考えられるが、あるいは図中の尊名を示す文字や色彩を指示したとみられる文字が江戸末期から明治以降のものともみられることから、東京高等師範学校時代前後において模写された可能性も考えられる。制作年代については、模写したとみられる松谷天来について明らかにすることが期待されるが、少なくとも東京高等師範学校の関係者名簿には、松谷天来なる人物は掲載されない。

二、東京国立博物館所蔵『賢哲図像』と『七十二賢像賛』

（一）各図の概要

東京国立博物館所蔵狩野常信筆『賢哲図像』は、絹本着色、東西の二巻に分かれており、現在の博物館登録名称は「賢哲図像」であるが、外題は「賢儒肖像」となっており、箱横には分類番号と共に「賢哲像」と記した紙が貼られている。また『東京帝室博物館美術課列品絵画彫刻目録』（大正九年一月刊行）（22）には、「賢哲像」となっており、箱の紙は同時期のものと思われる。さらに「賢哲図像」という名称はその後につけられたものとみられる。

『昌平志』においては、宝永元年（一七〇四）狩野常信により、「賢儒図像」が再び制作されたことが記されているが（23）、この「賢儒図像」が「賢儒肖像」すなわち『賢哲図像』であるかは定かでない。さらに『古画備考』によれば、「宝永六年十一月六日遷幸新造内裡」に「再図聖賢図」とあり、常信が御所の「賢聖障子図」制作に携わっていることが記されている。湯島聖堂内の「賢儒図像」を描いた五年後のことである。『賢哲図像』が描かれたものこの前後ではないかと推察される。

しかし特筆すべきは、東京国立博物館所蔵狩野常信筆《賢哲図像》にも、筑波大学所蔵狩野山雪筆《歴聖大儒像》や東京国立博物館所蔵柴野邦彦写「賢聖障子名臣冠服考証」に捺されている「浅草文庫」印が捺されていることである。

少なくとも《賢哲図像》については、湯島聖堂から《歴聖大儒像》等と共に、東京国立博物館に移管されたものではないかと考えることができる。『東京国立博物館百年史』によると、明治九年（一八七六）から明治一三年（一八八〇）にかけて列品全体が急増、明治一三年（一八八〇）から三〇年（一八九七）にかけて、歴史部美術部の列品の数が急増しているとある（24）。特に明治一二年（一八八九）にはそれ以前に収蔵された、つまり旧博物館から引き継いだ列品を多く登録している（25）。明治一二年（一八八九）とは、東京教育博物館から、湯島の聖堂内へと移った東京高等師範学校附属博物館と、そのまま上野に残った宮内省所属の博物館と文部省所管の東京図書館とに分かれ、帝国博物館と改称した年にあたる（26）。前出の『東京帝室博物館美術課列品絵画彫刻目録』（大正九年一月刊行）と突き合わせてみると、《賢哲図像》の目録の前後には、この旧博物館引継の列品が数多く記載されており、《賢哲図像》もこの中に含まれていたと考えられる。さらに《歴聖大儒像》同様《賢哲図像》には、「浅草文庫」印があることから、先にも触れたが、明治七年（一八七二）湯島聖堂内の書籍館から蔵書と共に、浅草文庫に移され、明治一四年（一八八一）上野の博物館新設に伴う移転の際、浅草文庫から蔵書と共に再び移されたのではないかと推定される。一方、明治九年（一八七六）には草創期の博物館から文部省学務課への移管について触れており、譲渡したものとして、「旧大成殿安置の孔子像、扁額等四十点」を挙げており、「従来大成殿に安置してあったもので、扁額も当然ここにおくべき

ものであるから」と、「申し出に基づいて返還した」とある（27）。ただし、「浅草文庫」印がある《歴聖大儒像》や《賢哲図像》は、この中には含まれなかったとみられる。

加えて、常信筆《賢哲図像》と、『昌平志』の「賢儒図像」との同一性が推定される、筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》と見比べると、その図像内容及び各人物の描き方、筆致に幾ばくかの類似性を見いだすことができる。

一方、『七十二賢像賛』は、明の万曆癸巳年（一五九三）に刊行されたもので、「歴聖大儒像」との類似性を指摘されている『新刻歴代聖賢像賛』と同年に刊行されている。杉原氏によって、粉本としてすでに何点か、挙げられているが（28）、この『新刻歴代聖賢像賛』もそういった中に含まれるものと思われる。また、『江戸時代の古版本』によると、主に室町時代から江戸時代にかけて、こうした中国の「絵入刊本」、「図入版本」が多く翻刻されていたとされ（29）、寛永二〇年（一六四三）には小島弥左衛門によって和刻本『聖賢像賛』の初版が刊行されている。小林宏光氏は、『聖賢像賛』を含む明末人物版画を正徳二年（一七二二）の自序のある画譜『画筌』にまとめ、近世日本画壇に最初に紹介したのは、狩野派系の画家林守篤であるとし、狩野派の絵師たちが『聖賢像賛』を聖人や賢人の粉本としてかなり利用していたことを指摘している（30）。従って常信が山雪同様に参考にした可能性も少ないといえる。この『聖賢像賛』は『新刻歴代聖賢像賛』と構成や筆致が異なるが、万暦版を翻刻せるものとされている（31）。

『聖廟祝典図考』は、ずっと降って、清の道光六年（一八二六年）に刊行されたものであるが、その図様は『七十二賢像賛』よりも線描が簡略化されたものである以外、ほぼ同一の内容である。同じく『江戸時代の古版本』によると、『聖賢像賛』は、「清時代万暦版を翻刻せるものを更に、光緒四年重

版せるものあり」とあり(32)、かなり翻刻され、出回っていたものと思われる。従って、『聖廟祝典図考』は、『七十二賢像贊』の内容を踏襲あるいは流れを汲んだものと位置づけ、『七十二賢像贊』には含まれない図様を補うものとして取り上げることとした。

(二) 図様の比較

すでに、筑波大学所蔵狩野山雪筆《歴聖大儒像》と中国の粉本との類似性は指摘されており、『賢儒図像扁額模本』においても、同様に中国の粉本との関連性を触れられている(33)。本稿では類似性の認められる作品として東京国立博物館所蔵狩野常信筆《賢哲図像》と『七十二賢像贊』(国立国会図書館所蔵)、『聖廟祝典図考』の三点との比較を試みた。その結果、主に人物の姿勢や持ち物着眼し、分類すると、①《賢儒図像扁額模本》と《賢哲図像》との類似性が認められる。②《賢儒図像扁額模本》と『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』との類似性が認められる。③《賢哲図像》と『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』のいずれの図においても類似性が認められる。④《賢哲図像》と『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』の図を組み合わせた図が《賢儒図像扁額模本》に認められる。⑤それ以外のものと、大きく五点に分けることができた。以下詳細に見ていくこととする。

なお、本文で《賢儒図像扁額模本》、『賢哲図像』、『七十二賢像贊』もしくは『聖廟祝典図考』を比較しているが、これを分かりやすく明示するために、図版では、上段に《賢儒図像扁額模本》、中段に《賢哲図像》、下段に『七十二賢像贊』もしくは『聖廟祝典図考』を配置した。また賢儒たちの名称は最上段に振り仮名とあわせて列記してある。なお、名称及び振り仮名は原文に則した。しかし、前述したように、『賢儒図像扁額模本』には、欠失部分があ

るため、挿図15、16では、該当箇所と思われる《賢哲図像》、『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』をそれぞれ上段、中段、下段に提示することで補った。

①《賢儒図像扁額模本》と《賢哲図像》との類似性がより認められる図

- 「左ノ一」(挿図1) 原憲・南宮适・商瞿・漆雕開
- 「左ノ二」(挿図2) 伯虔
- 「左ノ三」(挿図3) 冉季
- 「左ノ四」(挿図4) 奚容蒧・句井疆
- 「左ノ五」(挿図5) 燕伋・邾巽
- 「左ノ七」(挿図6) 左丘明・高堂生・毛萇・杜子春・王通
- 「左ノ八」(挿図7) 歐陽脩・楊時・陸九淵・王守仁
- 「右ノ一」(挿図8) 宓不齐
- 「右ノ五」(挿図11) 叔仲會
- 「右ノ六」(挿図12) 施之常
- 「右ノ七」(挿図13) 伏勝・韓愈
- 「右ノ八」(挿図14) 胡瑗・司馬光・真德秀・張栻

《賢儒図像扁額模本》と《賢哲図像》において、全く同じ姿勢のもの、それに近い姿勢であるが、持ち物に相違があるものなどもここに分類した。その結果、顕著なのは「左ノ一」と、『七十二賢像贊』には含まれていない先儒像を描いた「左ノ七」「左ノ八」「右ノ八」の人物が多くがこの系統に属していることである。

②《賢儒図像扁額模本》と『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』との類似性がより認められる図

「左ノ一」(挿図1) 澹臺滅明

「左ノ二」(挿図2) 樊須・公西赤・梁鱣

「左ノ三」(挿図3) 漆雕徒父・任不齐

「右ノ一」(挿図8) 高柴・司馬耕

「右ノ二」(挿図9) 有若・顔辛・曹卹

「右ノ四」(挿図10) 公肩定

「右ノ五」(挿図11) 鄭國

「右ノ六」(挿図12) 申根・顔會

「右ノ八」(挿図14) 胡安國

①とは逆に「賢聖障子図」と『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』において、全く同じ姿勢のもの、それに近い姿勢であるが、持ち物に相違があるものなどもここに分類した。その結果、「左」の図よりも「右」の図がより多く含まれることとなった。

③《賢儒圖像扁額模本》と《賢哲圖像》、『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』のいずれの図においても類似性が認められる図

「左ノ二」(挿図2) 冉雍

「右ノ一」(挿図8) 公哲哀

「左ノ三」(挿図3) 商澤

「右ノ四」(挿図10) 榮旂

「左ノ五」(挿図5) 顔之僕

「右ノ五」(挿図11) 廉絜

「左ノ七」(挿図6) 穀梁赤

「右ノ七」(挿図13) 后蒼

「左ノ八」(挿図7) 許衡

「右ノ八」(挿図14) 呂祖謙

項目名の通り、『賢儒圖像扁額模本』と『賢哲圖像』、『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』のいずれの図においても類似性が認められる図をここに分類した。各図にほぼ一休ずつ配されていることが分かる。

④《賢哲圖像》と『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』の図を組み合わせた図が《賢儒圖像扁額模本》に認められる図

「左ノ三」(挿図3) 漆雕哆

「左ノ四」(挿図4) 公良孺・顔祖

「左ノ五」(挿図5) 公祖句茲・縣成・樂欬

「左ノ八」(挿図7) 蔡沈・陳獻章

「右ノ一」(挿図8) 公治長

「右ノ二」(挿図9) 巫馬期

「右ノ四」(挿図10) 鄔單・罕父黑

「右ノ五」(挿図11) 左人郢・原亢・狄黑

「右ノ六」(挿図12) 孔忠・秦非

「右ノ七」(挿図13) 公羊高・孔安國・董仲舒

「右ノ八」(挿図14) 胡居仁

漆雕哆、公治長、巫馬期、罕父黑、左人郢、公羊高、孔安國等に見られるように、人物の基本的姿勢や持ち物について『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』を基調としながらも、体の向きや顔の傾き加減、視線の落とし方を微妙に《賢哲圖像》の人物に見られるように直立不動に近い形に修正を加えているものと、狄黑、孔忠等に見られるように人物の持つ持ち物は『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』を用い、人物の姿勢については《賢哲圖像》を用いているものなどを分類した。

⑤それ以外のもの

「右ノ四」(挿図10) 后虔

「右ノ八」(挿図14) 薛瑄

后度については、『七十二賢像贊』において、奚容藏の図(挿図4)であったものを、『賢儒圖像扁額模本』においては后度の図として用いている(34)。

検討の結果、全般的に『賢儒圖像扁額模本』は『賢哲圖像』とも『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』とも偏りなく、認められることが見て取れる。常信の手による『賢哲圖像』は人物の姿勢に変化がなく、直立不動の形を保ち、衣装は詳細に描かれており、同じ狩野派狩野孝信が手がけた仁和寺の『賢聖障子図』に近く、より大和絵風と言える。それに対し、『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』は人物の姿勢や動きに開達さが見受けられ、持ち物も多彩な一方、衣装は簡素化されている。筑波大学の『賢儒圖像扁額模本』は釈奠の伝統を意識し、中国の粉本にみられる開達な動きや持ち物等の図様においては、部分的に取り入れ、描いている。しかし、基本的には姿勢や衣装の衣文線、顔面部の描き方において、『歴聖大儒像』や『賢哲圖像』に見られるような伝統的狩野派の『賢聖障子図』から、古典的スタイルを踏襲しているといえる。両図の特徴を兼ね備えた、筑波大学の『賢儒圖像扁額模本』は狩野派の手による物と見て差し支えないといえる。同時に、益信の模本というよりは、常信の模本である可能性が強いといえる。

最後に、欠失している二枚「左ノ六」(挿図15)「右ノ三」(挿図16)を再現することを試みると、「左ノ六」の歩叔乗、琴張、「右ノ三」の秦祖、顔高、壤駟赤、石作蜀、公夏首については『賢哲圖像』『七十二賢像贊』、『聖廟祝典図考』の両図に大きな相違は見られず、恐らくこれらの図の姿勢をそのまま踏襲しているものと推定される。一方、「左ノ六」の陳亢、公西蔵、公西輿如については若干の相違が見られるため、いずれかの図を踏襲していると考えられるが、尚、再考の余地もみられる。

おわりに

繰り返すが、元禄元年(一六八八)狩野益信が「賢儒圖像」を一六枚制作したのに始まり、元禄一六年(一七〇三)の罹災焼失により、宝永元年(一七〇四)狩野常信が再度制作し、寛政一二年(一八〇〇)の撤廃されるまで、湯島聖堂内の先賢先儒八九人を描いた一六枚の扁額を掲げていたとする『昌平志』の記述は(35)、少なくとも江戸時代初期においては『賢儒圖像扁額』も『歴聖大儒像』同様、重要視されていたことを示しているといえる。

筑波大学附属図書館所蔵『賢儒圖像扁額模本』が『昌平志』に記される、先賢先儒八九人を描いた一六枚の扁額の下絵を指すものと、報告書において推定した根拠ともなった、聖堂内の配祀順についても、幕府の儒教を尊ぶ姿勢が示されているといえる。配祀順を記述及び図に示した配祀図は、『昌平志』の元禄四年(一六九一)改作『昌平廟学図(正位暨配享従祀諸賢儒方位次序図)』(36)の他、「元禄四年閏八月二日」と記され、同時期に描かれたとみられる『聖堂之画図』を報告書においてすでにあげている。配祀順は同様でも、人物の姿態及び画風については、筑波大学所蔵『賢儒圖像扁額模本』とは全く異なるものである『聖堂之画図』は菱川派様式と指摘され、菱川師宣あるいは菱川派の絵師によるものと考えられている(37)。この図は『聖堂略志』に所収されている他(38)、江戸東京博物館、菱川師宣記念館、大東急文庫に加え、東京国立博物館においても所蔵されている(39)。特に東京国立博物館所蔵の図については、森嶋外が帝室博物館総長兼図書頭の職に就いていた、大正六年(一九一七)から大正十一年(一九二二)にかけて作成した博物館所蔵書籍の解題(40)に、「浅草文庫」印のあることが確認されている、柴野邦彦写『賢聖障子名臣冠服考証』と共に記載されている。こ

のことは、この図もまた『歴聖大儒像』『賢哲図像』と同様の変遷を経て、東京国立博物館に収蔵された可能性を指摘することができる。また同時に、この図が広く流布されていた可能性も示している。元禄四年（二六九一）とは、五代將軍綱吉の命により移建された湯島聖堂大成殿が落成し、孔子及び四配像が遷座されると共に、賢儒図像扁額が大成殿兩廡に掲げられ、最初の釈奠が行われた重要な年にあたる。賢儒図像扁額と、配祀順、湯島聖堂の俯瞰図を示したこの『聖堂之画図』は、湯島聖堂を広く世に知らしめる役割と共に、湯島聖堂における賢儒図像扁額の重要性も示唆しているといえる。

その上、『賢儒図像扁額模本』にみられる描画方法は、美術の表現の方向性としては、足利学校の聖像仏師と同様に、作者は中国的表現を描いた明の粉本よりも、京都の聖賢図においてみられる、古典的な流れのある表現を重視していたことを示しているといえる。これは、儒教美術を通して、京都に代々流れる権威を、新しく開府した江戸に持ち込むという意識が作用していたのではないかと考えられる。

この度、常信の賢儒図像扁額の流れを汲むとみられると結論づけられた、筑波大学所蔵『賢儒図像扁額模本』は、賢儒図像扁額を知る上で、さらにはその背景となる江戸時代の儒教思想に根ざした美術や、それを利用した政治的思惑を知る上においても、重要な資料といえる。

注

- (1) 大冢逯『昌平志 卷第一 廟図誌』及『昌平志 卷第五 儀節誌』一八〇〇年。参照は以下の文献による。
- 『日本教育文庫 学校篇』同文館 一九一一年 三六―三七頁、一五一頁。
- (2) 前掲書注1 三八頁『昌平志 卷第一 廟図誌』。
- (3) 三宅米吉・中山久四郎編『聖堂略志』財団法人斯文会 一九三五年 五五頁。

- (4) 大冢逯『昌平志 卷第一 廟図誌』参照は以下の文献による。

文部省編『日本教育史資料 七』臨川書店 一九七〇年 四二六頁。

- (5) 杉原たく哉『狩野山雪筆歴聖大儒像について』『美術史研究 三〇冊』早稲田大学美術史学会 一九九二年 二月 九七―一〇〇頁。

- (6) 前掲書注4 四二六―四二七頁。

- (7) 前掲書注1 三八頁、五八頁、六八頁『昌平志 卷第一 廟図誌』及『昌平志 卷第二 事實誌』。

- (8) 前掲書注3 二二頁、五五頁。

- (9) 『東京高等師範学校図書館和漢書名目録』一九一五年 二二〇頁。

- (10) 『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』一九三四年 七九四頁。

- (11) 『古事類苑 三一 器用部一』吉川弘文館 一九七〇年 八七八頁。

- 『本朝画史 二 上古画録』（狩野永納編）の一文を掲載している。

- 『釈注 本朝画史』（同朋舎出版 一九八五年 五二―五八頁）に訳文あり。

- (12) 前掲書注1 一八七五―一八八三頁。

- 家永三郎『上代倭絵全史』墨水書房 一九六六年 二二―二六頁。

- 金井紫雲編『復刻版 東洋画題綜覧』国書刊行会 一九九六年 二九六頁。

いづれにおいても、平安京内裏紫宸殿に所在した障子絵で、漢唐代の功臣三人を描いたものとして、同様の内容を示している。

この他に『賢聖障子』について研究した論文として以下のものがあげられる。

石崎達二『賢聖障子』『史跡と古美術 六卷一号』一九三一年 一月 一一―一頁。

田中重久『紫宸殿の賢聖障子図』『日本壁画の研究』綜芸舎 一九七九年 二四五―二五三頁。

川本重雄・川本桂子・三浦正幸『賢聖障子の研究―仁和寺藏慶長度賢聖障子を中心に―』『国華 一〇二八』一九七九年 一月 九―二六頁 及『国華 一〇二九号』一九七九年 二月 七―三一頁。

- (13) 前掲書注1 二二五頁。

- (14) 高木三男『歴聖大儒像（聖賢像軸）』『筑波大学附属図書館報 つくばね 九卷 三号』一九八三年 二月 九―一頁。

また、『歴聖大儒像』に関する研究として、次の論文があげられる。

土居次義『狩野山雪の歴聖大儒像』『茶道雑誌 二七卷一〇号』一九六三年 一〇月 二五―三〇頁。

なお参照は以下の文献による。

土居次義『近世日本絵画の研究』美術出版社 一九七〇年 二九二―二九七頁。

- (15) 阿部弘蔵『浅草文庫』『学鐙 第七年十一号』一九〇三年 十一月 七頁。

- (16) 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史 本編』第一法規 一九七三年

六三―六五、一〇一―一〇二頁。

浅草文庫については、他に次の論考において詳しく記されている。

樋口秀雄『浅草文庫の創立と景況』『参考書誌研究 四号』一九七二年三月 一九頁。
なお参照は以下の文献による。

『浅草文庫書目解題 第三卷』ゆまに書房 二〇〇一年 二九七―三一一頁。

(17) 『内閣文庫小史』改訂 内閣文庫国書分類目録下 国立公文書館内閣文庫
一九七五年 一九頁。

(18) 前掲注16 『東京国立博物館百年史 本編』一四二頁。

(19) 『孔子祭典会々報 第一号』一九〇七年一〇月 一一―三一頁。

(20) 『孔子祭典会々報 第八号』一九一五年四月 六―七頁。

(21) 前掲論文注5 一〇〇頁。

(22) 『東京帝室博物館美術課列品絵画彫刻目録』一九二〇年 二五頁。

(23) 前掲注1 三八頁『昌平志 卷第一 廟図誌』。

(24) 前掲書注16 『東京国立博物館百年史 本編』二七八頁。

(25) 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史 資料編』第二法規 一九七三年
二三五頁。

明治五年(一八七二)から昭和四七年(一九七二)までの主要列品年次収蔵一覧が
掲載されている。

(26) 後藤純郎『官立浅草文庫の成立と変遷(Ⅱ)』『図書館学会年報 四〇巻三号』
一九九四年九月 九七―九八頁。

(27) 前掲書注16 『東京国立博物館百年史 本編』一五一頁。

(28) 前掲論文注5 九七―一〇〇頁。

(29) 奥野彦六『江戸時代の古版本』東洋堂 一九四四年 三〇―三三、四五―五一
頁。

(30) 小林宏光『画筌』卷四 漢人物図像考『実践女子大学文学部紀要 三二号』
一九九〇年三月 一二九頁―一三九頁。

小林宏光『中国画譜の舶載、翻刻と和製画譜の誕生』『開館三周年記念 近世絵画と
画譜・絵手本展Ⅱ』―名画を生んだ版画―町田市立国際版画美術館 一九九〇年
一一四―一一六頁。

(31) 前掲書注29 四九頁―二九三頁。

(32) 前掲書注29 四九頁二九三頁。

(33) 前掲論文注5 一〇〇頁。

(34) 杉原たく哉『聖賢像の系譜―背を向けた肖像をめぐる―』『美術史研究
三六冊』早稲田大学美術史学会 一九九八年二月 一一五、一六一―一七頁。

(35) 前掲書注1 三八、五八、六八、九六頁『昌平志 卷第一 廟図誌』及『昌平

志 卷第二 事実誌』。

(36) 前掲書注4 四二六頁。

(37) 浅野秀剛『菱川師宣の版画』『菱川師宣展図録』千葉市美術館 二〇〇〇年
二〇六頁。

(38) 前掲書注3に所収。

(39) 江戸東京博物館所蔵本については、前掲論文注37を参照。

菱川師宣記念館所蔵本については、『菱川師宣三百年顕彰祭・菱川師宣記念館十周年記
念菱川師宣作品集』菱川師宣記念館 一九九五年 図版(五九頁)及び図版解説(一
二二頁)を参照。

大東急文庫所蔵本については、『江戸は日本人を創った 湯島聖堂三〇〇年記念展 湯
島聖堂と江戸時代』(財団法人斯文会 一九九〇年) 図版及び図版解説(図版番号F
14)を参照。

東京国立博物館所蔵本については、『隅外自筆 帝室博物館蔵書解題 第六卷』
(森陽外 ゆまに書房 二〇〇三年) 二六四頁を参照。

『聖堂之画図』について、図版が掲載されている菱川師宣記念館所蔵本、大東急文
庫所蔵本は元より、図の上部に「聖堂之画図」左辺に「元禄四年閏八月二十一日」

の記述、九五・六×八七・五cm(江戸東京博物館所蔵本)、墨摺折本、一枚、九四・
〇×八八・〇cm(菱川師宣記念館所蔵本)、一枚、「元禄四年閏八月二十一日」の記
述(東京国立博物館所蔵本)とそれぞれ説明しており、四図は『聖堂略史』所収の
図と同一のものとみられる。

(40) 『隅外自筆 帝室博物館蔵書解題 別巻』森陽外 ゆまに書房 二〇〇三年
帝室博物館蔵書とは、明治五年(一八七二)の開館以来、文部省博物館書籍館、浅
草文庫、博物館書籍室という変遷を経て、東京帝室博物館時代に収集、購入、寄贈
等により収蔵した図書を指す。

図版

挿図1「左ノ一」

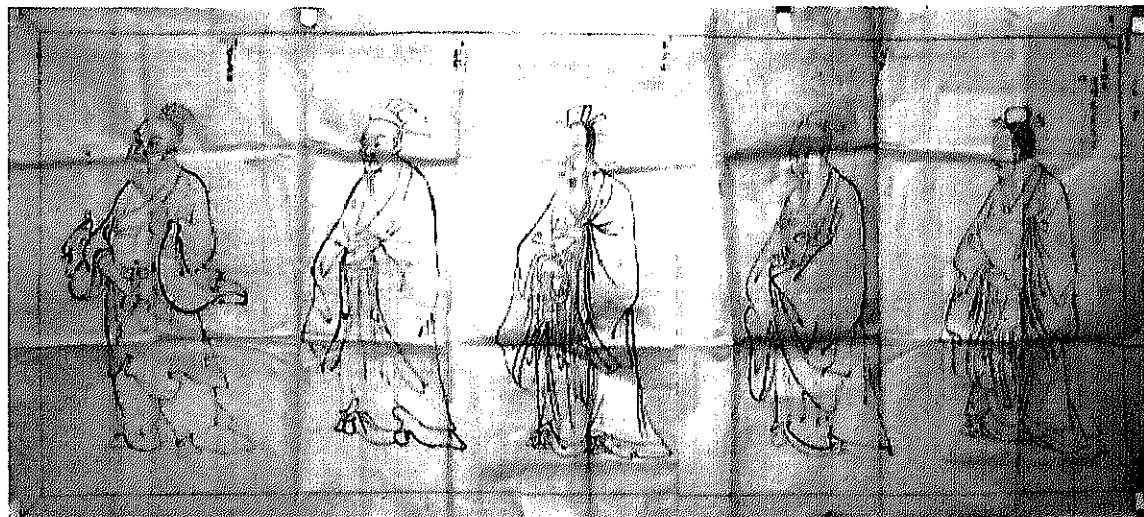
左五
漆雕開
シツテウカイ

左四
商瞿
シヤウク

左三
南宮适
ナンキウカツ

左二
原憲
ゲンケン

左一
澹臺滅明
タンタイヘツメイ



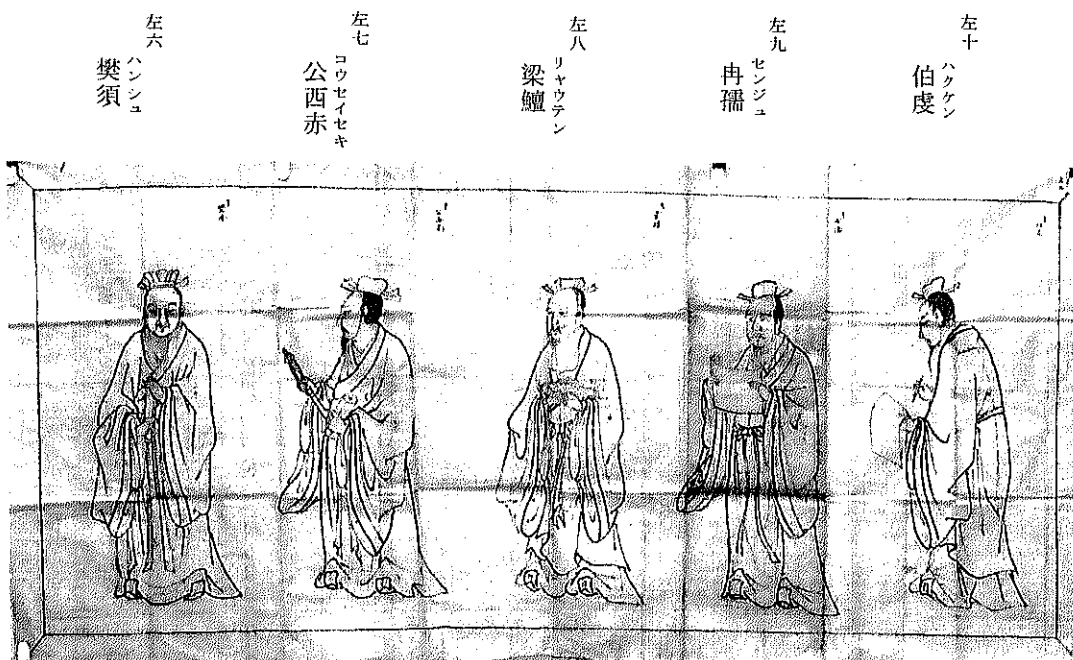
《賢儒圖像扁額模本》筑波大学附属図書館蔵



《賢哲圖像》東京国立博物館蔵



『七十二賢像贊』国立国会図書館蔵



《賢儒図像扁額模本》



《賢哲図像》



《七十二賢像賛》

《賢儒圖像扁額模本》



《賢哲圖像》



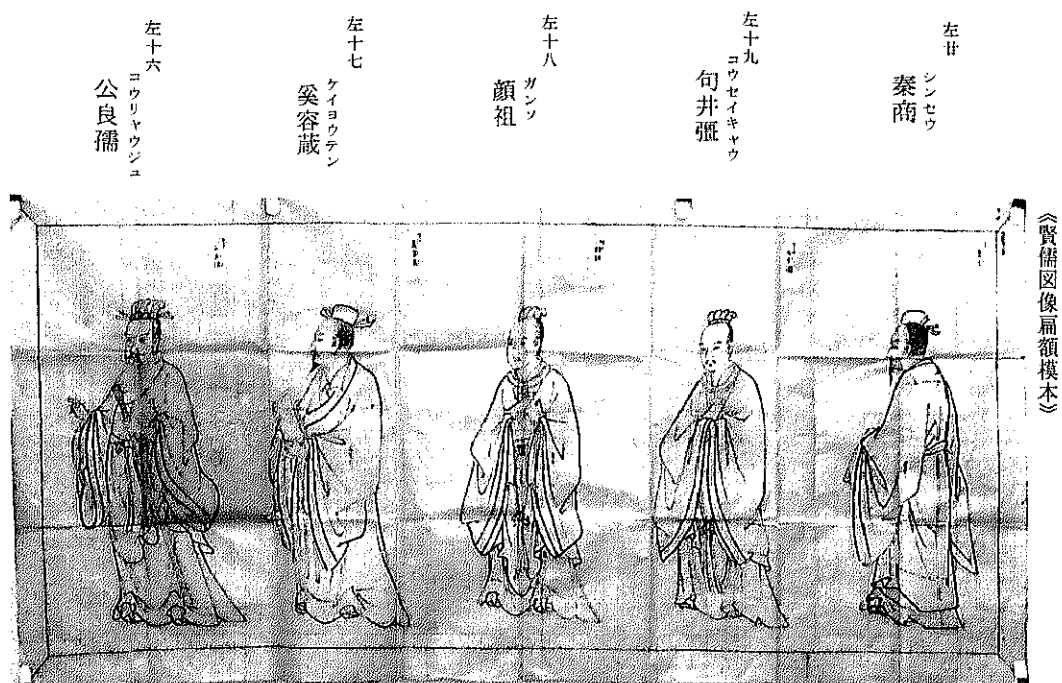
《七十二賢像贊》
任不齊

漆雕徒父

漆雕咥



挿図4 「左ノ四」



秦商・奚容蒧——《七十二賢像贊》
句井彊・顔祖・公良孺——《聖廟祝典図考》複製本
筑波大学附属図書館蔵

插图5 「左ノ五」

左廿一
公祖句茲
コウソコウジ

左廿二
縣成
ケンセイ

左廿三
燕伋
エンキウ

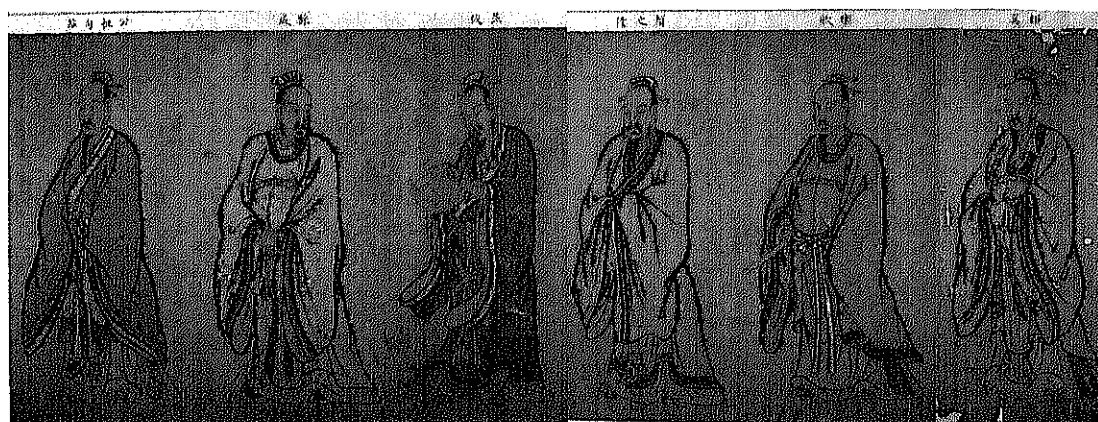
左廿四
顔之僕
ガンシボク

左廿五
樂欬
ガクカイ

左廿六
邳叟
キソン



《賢儒圖像扁額模本》



《賢哲圖像》



挿図6「左ノ七」

先儒左一
左丘明
サキウメイ

先儒左二
穀梁赤
コクリヤウセキ

先儒左三
高堂生
コウドウセイ

先儒左四
毛萇
モウチャウ

先儒左五
杜子春
トシチュン

先儒左六
王通
オウトウ



《賢儒図像扁額模本》



《賢哲図像》



《聖廟祝典図考》 筑波大学附属図書館蔵

挿図7「左ノ八」

先儒左十三
オウシユジン
王守仁

先儒左十二
チンケンシャウ
陳獻章

先儒左十一
キヨコウ
許衡

先儒左十
サイチン
蔡沈

先儒左九
リクキウエン
陸九淵

先儒左八
ヤウジ
楊時

先儒左七
ヲウヤウシユ
歐陽脩



《賢儒図像扁額模本》



《賢哲図像》



《聖廟祝典図考》

挿図8「右ノ二」

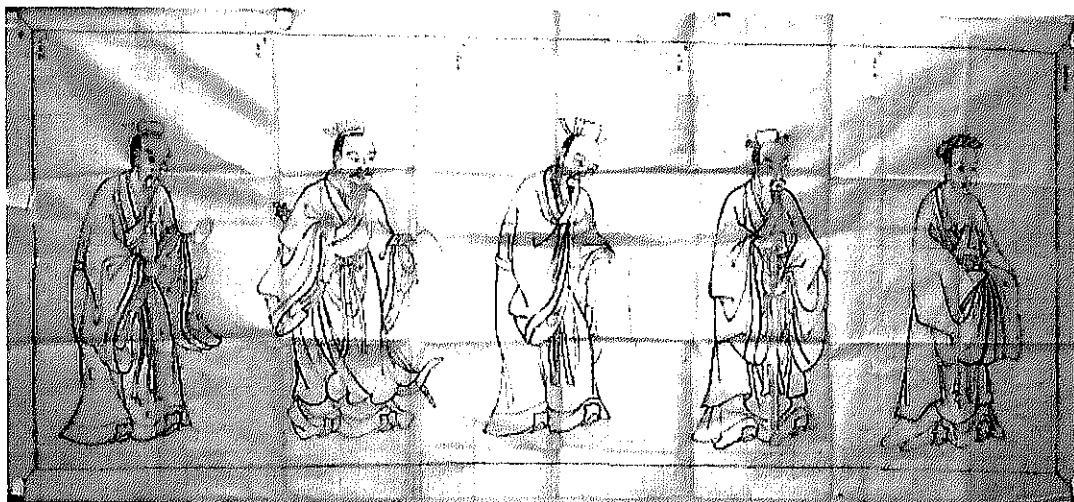
右一
宓不齊
フツフサイ

右二
公治長
コウヤチャウ

右三
公哲哀
コウセキサイ

右四
高柴
コウサイ

右五
司馬耕
シバコウ



《賢儒図像扁額模本》

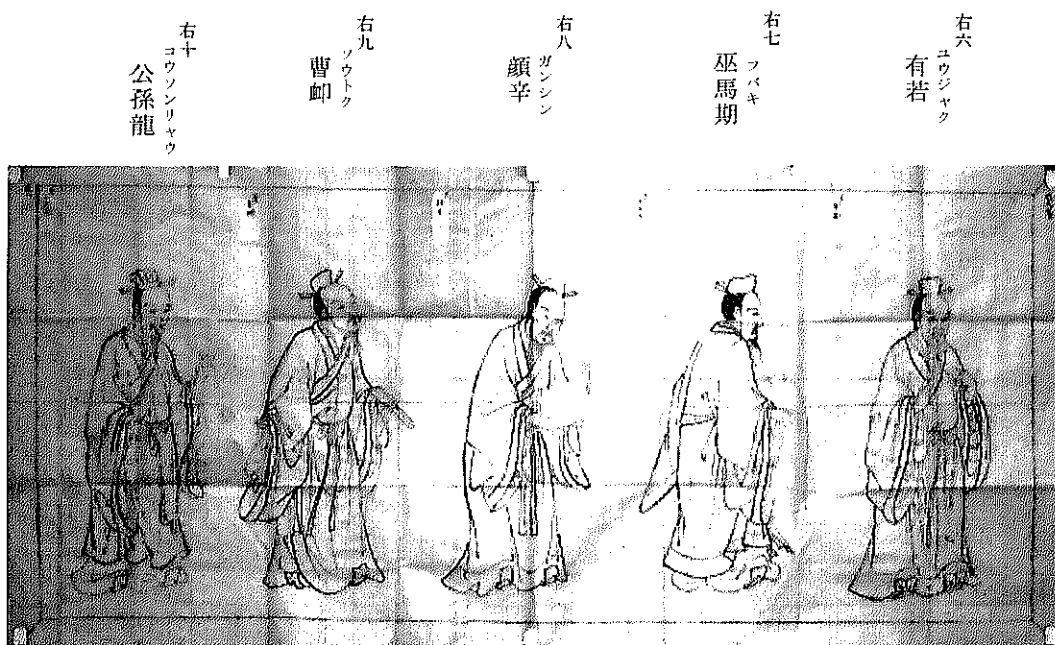


《賢哲図像》



《七十二賢像贊冊》

《賢儒図像扁額模本》



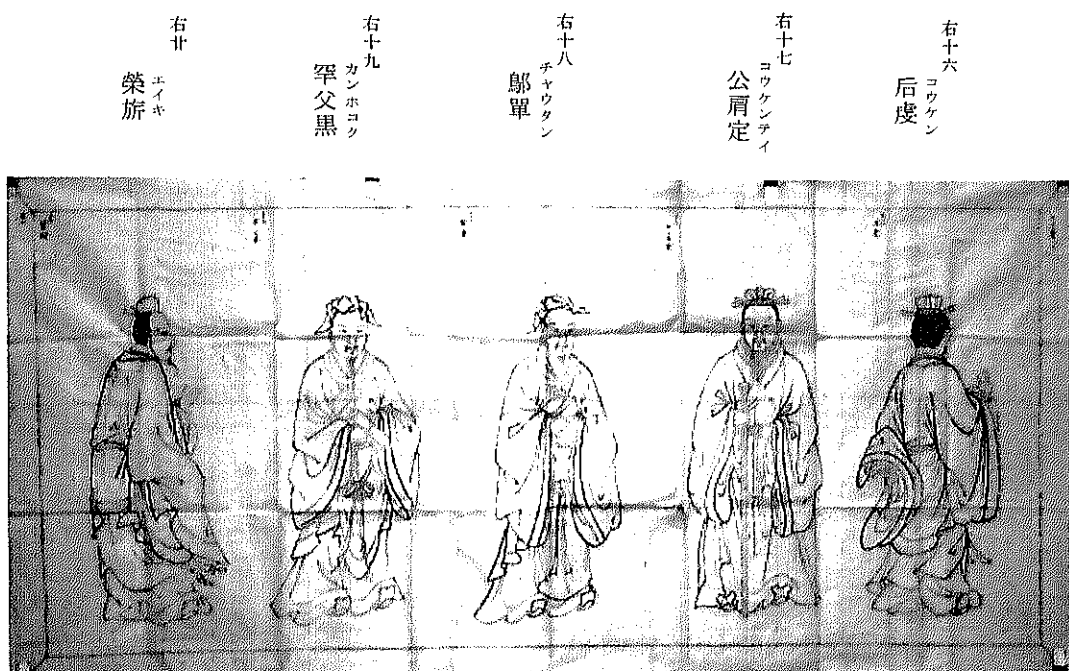
《賢哲図像》



《七十二賢像贊》

插图10 「右ノ四」

《賢儒図像屈領模本》

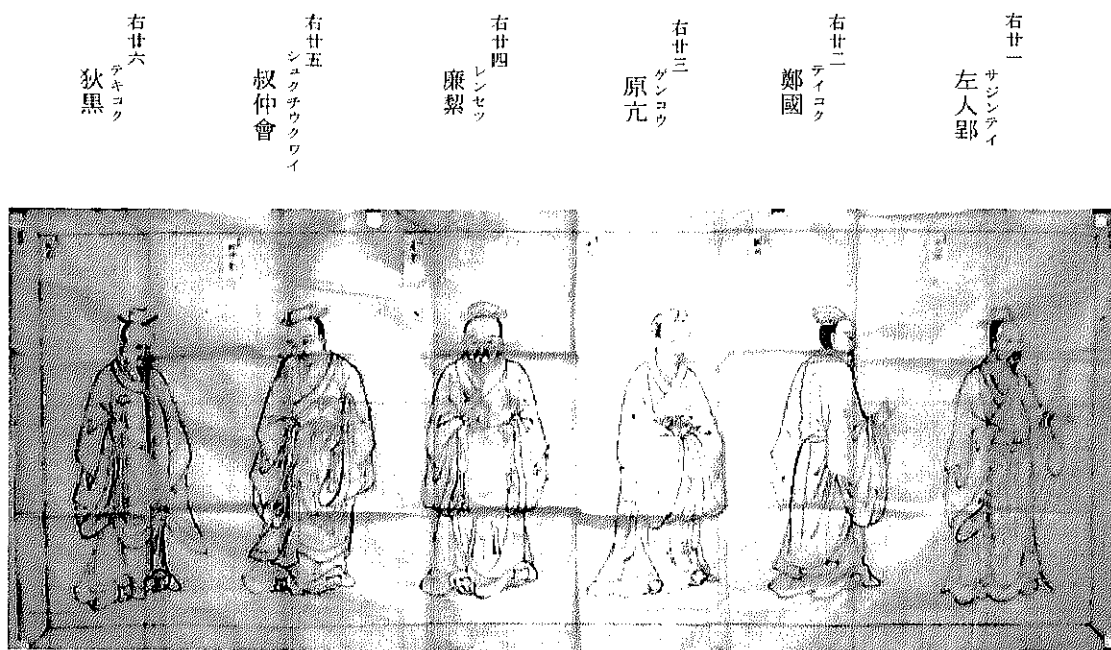


《賢哲図像》



后虔・公肩定・鄒單——《聖廟祝典図考》
榮旂——《七十二賢像贊》

《賢儒図像扁額模本》



《賢儒図像扁額模本》



左人郢・鄭國・廉絜・狄黒―《七十二賢像贊》
原元―《聖廟祝典図考》

左人郢

鄭國

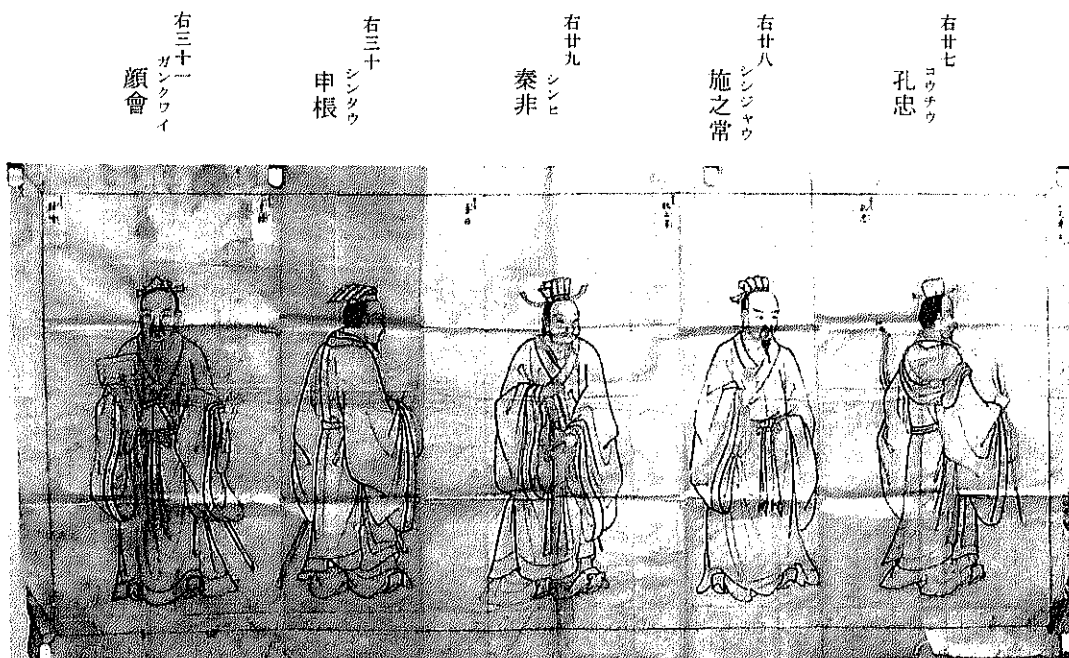
廉絜

狄黒



挿図12 「右ノ六」

《賢儒圖像扁額模本》



《賢哲圖像》



《七十二賢像贊》
孔忠



秦非



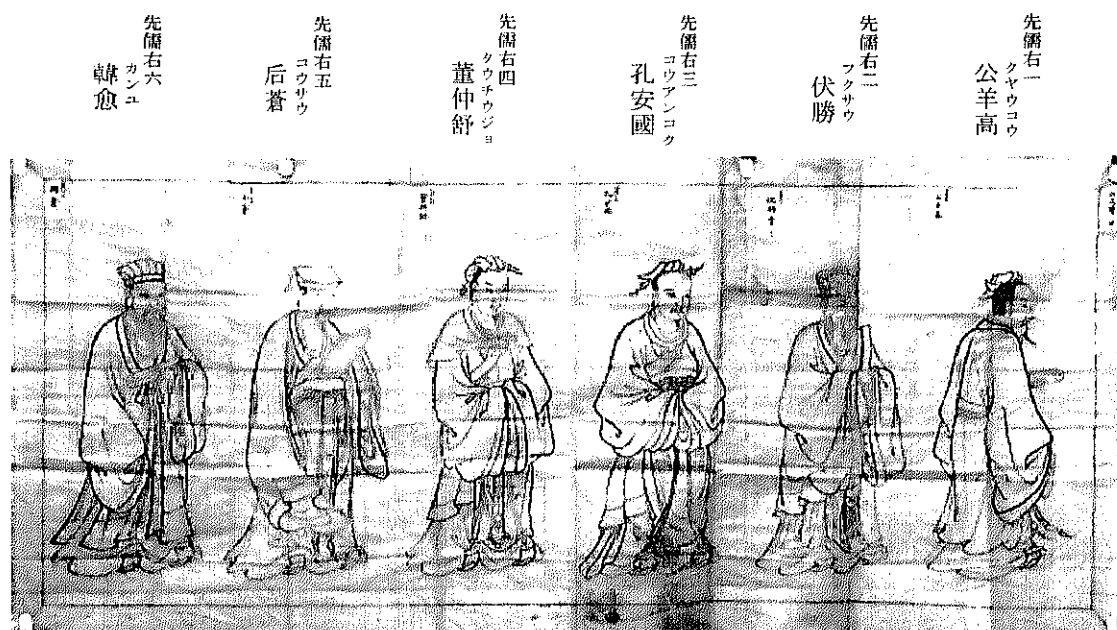
申根



顔會



挿図13 「右ノ七」



《賢儒画像扁額模本》



《賢哲画像》



《聖廟祝典図考》

先儒右七
コクワン
胡瑗

先儒右八
シバコウ
司馬光

先儒右九
コアンコク
胡安國

先儒右十
リョウケン
呂祖謙

先儒右十一
チャウシキ
張栻

先儒右十二
シントクシウ
真徳秀

先儒右十三
セツセン
薛瑄

先儒右十四
コキョジン
胡居仁



《賢儒圖像扁額模本》

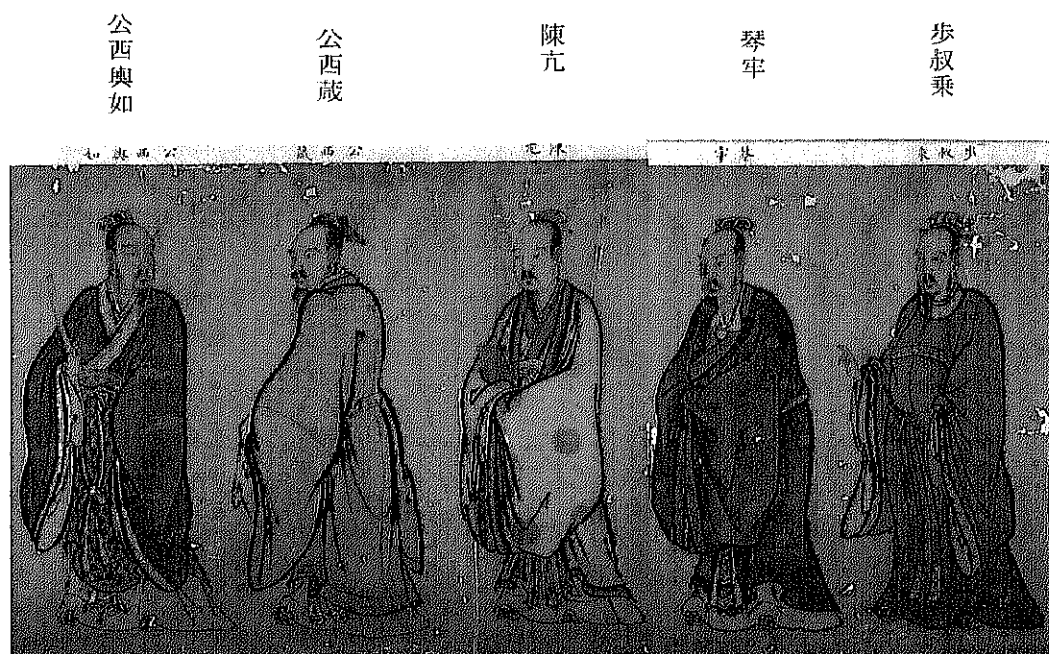


《賢哲圖像》



《聖廟祝典図考》

插图15〔左ノ六〕※《賢儒圖像扁額模本》欠失部分



《賢哲圖像》

《七十二賢像贊》
步叔乘



《聖廟祝典圖考》



挿図16 「右ノ三」※《賢儒図像扁額模本》欠失部分

《賢哲図像》



《七十二賢像贊》

秦祖

顔高

壤駟赤

石作蜀



《聖廟祝典図考》

